

令和紙



おりおりの記

歴史散歩のすすめ

元国際金融公社
東京駐在特別代表

入谷 盛宣

日本橋兜町に勤務していた今から十数年前、筆者は昼休みに近くの人形町や八丁堀などを歩き回ったが、まさに歴史の宝庫だと感じた。それ以来、特に江戸時代を舞台にした小説を読むと、臨場感が抜群で、俄然面白くなった。その数年後に、東京都内（23区及び都下）の歴史散歩を始めたのである。

まず、市販の様々な案内書と各市区町村がまとめている名所案内やウォーキング地図を参考に、自分の散歩コースを設定する。次に、そのコースを実際に歩いて、この目で目指す歴史的モニュメントや周辺の状況を確認する。あとで様々な文献やネット情報で補足すると、その土地の歴史的・文化的な背景などがさらに良く見えてくる。自治体その他の団体の主催するガイド付ツアーに参加すると、より効率よく巡ることができるので推奨したい。このような歴史散歩を通じて、都内各地に対する理解が深まり、また新たに知ることが実に多いので、知的好奇心は大いに満たされるのである。

ここで具体的な例として、現在の日本橋茅場町・八丁堀・新川辺りの、江戸時代における変遷を見ることとしよう。徳川家康が江戸に入府した1590年には、この地域は一面遠浅の海で、水辺とその周辺には葦が生い茂り、現在の兜町や新川の辺りに砂洲が幾つかあるだけだった。家康は、当時の海岸線に沿って日本橋川と楓川（現在の高速

都心環状線）を掘削し、主要な交通路とするとともに、川に沿って河岸を築いた。八丁堀は、海に突き出る形で両側に堤防を築いて水路とし、楓川の河岸に行くには必ずここを経由することとされた。

その後この地域の海は、神田山を崩した土などで急速に埋め立てられ、同時に江戸湊も海岸線とともに東遷した。八丁堀舟入跡は、現在は亀島川の下流にある。その少し南に鉄砲洲稲荷神社がある。港の入口に鎮座する稲荷として、海運業者や船乗りの信仰が篤かった。江戸湊の東遷に伴って、この神社は京橋・八丁堀を経て現在の鉄砲洲へと何度も移転したようだ。こうして江戸時代初期に埋め立てられた八丁堀・茅場町の一帯には、捕物帳でお馴染みの与力・同心組屋敷が置かれたのである。

筆者は、本年4月、『続 江戸東京歴史文学散歩』を高遠書房から出版、アマゾン・紀伊国屋書店をはじめ、全国の書店で販売されている。

